大阪府保育士会だより

ほほえみ

平成27年12月1日
第103号
大阪府社会福祉協議会
保育部会・保育士会
大阪市中央区中寺1-1-54
TEL 06-6762-9001

保育士の専門性を高める連続研修会

「保育士の専門性を高める連続研修会（園長・リーダー・主任保育士研修会）が実施され、8月17日、19日、25日の3日間、大阪社会福祉指導センターなどで開催されました。テーマと講師、主な内容は次の通り。

【第1日目】（第1部）
テーマ「親と子の心を支える保育の専門性」＝講師・島根大学教育学部教授　肥後功一氏

今後の保育に求められる力は、①保育実践研究力（発達の全体性を捉える）②リアリティ（頭と身体や感覚でわかる力）③Beingを支える（ありのままを受け入れてもらえた時、初めて人は変われる）④子どもの成長を守る枠組（型や枠があるからこそ自分らしさが確立される）の4つ。

大切なのは保育のベースラインである。

子育てとは、保護者がやり残しの自分の姿を子どもの中に見出し、もう一度自分のやり直しができる日々でもある。そんな視点をもち、保護者と子どもの大切な毎日を支援できる保育者でありたいものだ。

（第2部）
テーマ「子ども子育て支援新制度と保育の質～変わるべきもの、守るべきもの」＝講師・ジャーナリスト　猪熊弘子氏

新制度導入後の課題として、「子どもの権利」の視点が欠けている点が懸念される。「子どもの状態」ではなく「親の就労状況」によって認定され、「子どもの保育を受ける権利」に格差が生じているのではないか。

どんな制度下でも保育の「質」は担保されなければならず、その「質」とは「保育者そのもの」のあり方である。

「よりよい保育の実践」と「よりよい制度」の両輪が子どもたちの命と発達の保障を支えるのだと考える。

保育園は子どもの「命」を守り、愛情をもって育てる場所、どんな家庭環境の中で生きる子どもたちにも最善の居場所でなければならない。

【第2日目】（第1部）
テーマ『保育者のためのリスク・マネジメント―深刻事故を繰り返さないために』＝講師・NPO法人保育の安全研究・教育センター代表　掛札逸美氏

「安全、安心」のレベルは人それぞれ、日常のリスク・コミュニケーションから「安心」は生まれる。

ミスを完全になくすことは難しいが、ミスを減らすことはできる。行動マニュアルも大切ですが、ミスに気づく行動習慣を意識することが重要。今までの事故事例がどのような社会的経緯をもっているのかを勉強しておくことも大切です。

リスク・マネジメントの基礎は、組織内のコミュニケーション。

危なさや安全、保護者・家族対応などについて自由に話しあえる「風通しの良い」保育園（施設）づくりが肝心である。

（第2部）
テーマ『職員が辞めない職場、育つ職場』＝講師・千葉大学教育学部准教授　砂上史子氏

保育の仕事は「感情労働」であり、自らの感情をコントロールしながら保育を行うという重要な専門性である一方、ストレスの要因にもなっている。

「バーンアウト」を防ぐには、自分の感情を認めて自分をいたわり、仕事と私生活の区切りをつけるなど感情に適切に対処するエネルギーを補てんすること。管理職は職員の「バーンアウト」をよく理解し、兆候を早めに発見し必要なサポートを行いたい。

保育者を支える園全体のチームワークに必要なのは「お互いをよく知る」「自分の弱点を知る」「思いやり」である。保育者同士が互いに理解し協力しあう保育環境にまさる教育はない。

【第3日目】
テーマ『あなたの保育が今日から変わる！―ほめて育てる効果的なしつけ、ボーイズタウン・コモンセンスペアレンティング―』＝講師・情緒障害児短期治療施設あゆみの丘副施設長　堀健一氏

コモンセンスペアレンティングとは、アメリカで開発された子どもの養育技術のことで、特徴の一つは、子どもに自分自身をコントロールする方法（家族や社会の一員として適切な振る舞いができるようになる）を教えることにあります。

子どもに教える際のステップは、①問題行動を止める②子どもに行ってほしいことを具体的に説明する③理由を伝える④練習させる⑤具体的に誉める―といったサイクルです。

これを繰り返すことで大人と子どもの間に信頼関係が生まれ、子ども自身が適切な社会スキルを身につけていくのです。

（東大阪市　N・Y）

子育て支援シリーズ㊺

「わくわくひろば」配布し豊富な子育てメニューを予告

盛況の「すくすくサロン」特製スイーツでママの会話も弾む

吹田市・南ケ丘保育園

南ヶ丘保育園は昭和54年、吹田市の緑豊かな丘陵地に開園、現在定員150名。平成9年から吹田市地域子育て支援センター事業に取り組まれています。

近年、この地域は賃貸マンションが増え、若い子育て世帯の転入・転出が多く、おしゃれで若々しい街並みに変わりました。

園では子育て中のママやパパを応援する未就園児対象のさまざまな取り組みが行われています。毎月「みなみが丘のわくわくひろば」を発行し地域に配布されているのもその一つ。手描きのイラストが温かく、地域にすっかり定着しているということです。

最新版の11月号にはひと月のうち14日間に予定が書き込まれ、午前・午後含め18のメニューが入っています。予約が必要なのは、育児教室（2コース）・保育体験（給食体験含む）・ベビーマッサージがありますが、特に注目されるのは予約なし自由参加の内容が豊富に用意されていることです。

すくすくサロン・すくすく計測・フリールーム（午前午後5回）・園庭開放5回―などです。月1回のすくすくサロンには毎回40組余りの参加があり、ママさんたちには調理室特製の本格スイーツが1回100円で提供されます。おしゃべりも弾むひとときで。ママさんたちは自分の好みや時間の都合に合わせ、自由に選び参加されているそうです。

また、南ヶ丘公園で月1回開いている『青空ぴょんちゃん』は親子のふれあい遊びの場で、通りがかりの方でもどなたでも気軽に参加でき、引っ越してきたばかりの親子が地域の人たちと知り合ったり、園の催しに参加したりする入り口となっています。

杉山友子園長や主任保育士のお話から、園には園児や保護者以外に、日常的に多くの地域の親子が出入りし一緒に遊んでいるようすがうかがえ、通常の保育の中で受け入れている全職員の、子育て支援に携わる意識の高さを感じました。間口が広く、懐の深い地域への対応の姿勢は園全体の雰囲気にも反映、「おひさまの光がふりそそぎ、こどもたちの笑顔があふれている南の丘のような保育園でありたい」という園のパンフレットにあるように、訪問者にもフレンドリーで、元気一杯の子どもたちは次々話しかけ遊びに誘ってくれるのでした。

（吹田市　K・Y）

「食を営む力を培う」保育の実践について発表

―第4分科会で柏原市の国分保育園

第49回全国保育士会研究大会

第49回全国保育士会研究大会が10月21、22の両日、「こどもの命を育み、学ぶ意欲を育てる保育の実現をめざして～あなたが大事 共に歩む未来へ～」をメーンテーマに千葉県の幕張メッセで開催され、約1200人が参加しました。

初日は、全国保育士会会長の上村初美氏が子どもの育ちと保育をめぐる状況、全国保育士会の組織強化方策などについて基調報告。引き続き厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課企画官、楠目聖氏から、保育士確保に向けた取り組み、教育・保育施設における重大事故の防止策―などの行政説明が行われました。

記念講演では歌手のYae氏が登場、「未来＝こどもたち～農的暮らしと私の子育て～」と題し、自然豊かな里山での三人の子育て奮闘記、土に生きることの幸せやスローライフなど、田舎ならではの子どもたちの遊びや育ち、地域との交流について話され、美しい歌声も披露されました。

2日目の分科会では、第4分科会で大阪府保育士会から柏原市の国分保育園園長の伊藤裕子氏（写真左）と調理師の松浦秀子氏（同右）が保育の内容を深める「保育のなかの食育」をテーマに発表されました。

幼少期は人格形成の基となる五感の育ちが重要ですが、近年、欧米の生活様式が浸透し豊食になりがち。同保育園では家庭での食生活、生活習慣について調査、食の在り方の改善策を見出し、食を営む力を培う保育の実践を紹介。

食べない、食べる意欲がないなど食に問題のある子やアレルギー児には、保護者と園、保育現場と調理現場の連携、そして安心感から生まれる信頼が大切なことを強調されました。

助言者の聖徳大学教授、室田洋子氏は、環境としての保育士、その関わりの質が重要と指摘されました。

「食を営む力」の育成には保育所の役割が大きく、研究と実践、検証の大切さを改めて教えられました。

なお、次回の全国保育士会研究大会は神戸市で開催されます。

（大阪狭山市　K・J）

学びシリーズ34

保育におけるさまざまなリスク・マネジメント（第3回）

「対・保護者のリスク」を考える

保育の安全研究・教育センター代表
掛札逸美

●危機を減らすための
コミュニケーション

前回は園内で連絡をする方法をいくつか書きました。職員の間で連絡がスムーズに、正しく行われなければ、さまざまな面のリスクを上げてしまいます。

もうひとつ、職員のコミュニケーションに内在する深刻なリスクは、言うまでもなく対・保護者のリスクです。保護者の信頼を失う、保護者を怒らせる。それだけでなく、子どもに関する情報をうまく手渡すことができなければ、家庭で子どもの命を危険にさらすかもしれません。

保育現場で通常「保護者対応」と呼ばれているのは、いわゆる「クライシス・コミュニケーション」、つまりすでに何かできごと（危機＝クライシス）が起きて、保護者が感情（不安、怒りなど）を表出している場合のコミュニケーションです。これは、その園とその保護者の関係、職員と保護者との関係、両者の性格、これまでに起きたできごとの経緯などをもとにして、個別に次のコミュニケーションを考える必要があります。一般論はほとんど通用しません。

一方、問題やクライシスが起きないよう、あるいは、起きた時の解決を早めるために行なうコミュニケーションもあります。それが今回のテーマです。

●あらゆるリスクを書き出して説明しておく

日本の文化にはもともと、「これは言わなくてもわかるだろう」「常識のはず」「以心伝心」といった感覚があります。保育の現場にも、「子育ては本来、～だと保護者もみんなわかっているはず」という保育者の希望的観測（思い込み）があります（もっと言うと「保育者はみんな、～と考えているはず」という思い込みもあるでしょう）。

でも、いまや「常識」は通用しません。私自身は必ずしもそれを「価値観の多様化」と喜ぶ気持ちにはなれませんが、子育ても保育も、子どものケガへの対応もいまやバラバラ。「言わなくてもわかる」時代ではないことだけは事実です。

では、どうすればよいか。口頭で伝えれば誤解や伝え漏れが増えます。今から、来年度の初めに保護者に渡す文書を作り始めてください。保育園やこども園で起こりうるできごとについて、園の方針、起きた時の対応、保護者に求める理解・行動を書いておくのです。

これは、一種の「契約書」です。本当は入園を決める前の面接で渡して説明をし、理解を得るべきなのですが、園と保護者だけで入園を決めることがほとんどできない現状では、そこでする必要はないでしょう。

●方針・行動を
終始一貫したものに

文書にして説明し、「こういうことでお願いします」と伝えておけば、何かが起きた時に「あの時、文書でご説明したとおりです」と話し、園としては方針を変えないという意思を伝えることができます。また、その時ごとに対応が変わることによって、保護者の信頼を失うというリスクを小さくすることができます。

そして、何より職員ごと、保護者ごとに対応が変わるというもっとも大きなリスクを下げることができるでしょう。職員は保護者とそれぞれに関わりをもっていますし、職員と保護者の間にも当然、相性や好き嫌いがあります。そうすると、職員が保護者によって対応を変えてしまうことも起きます（例：特定の保護者に甘くなる、便宜を図る）。園が信頼を失う大きなリスクです。それを避けるためにも、紙に方針と対応を明記しておくのです。

●内容は具体的に！

では、どんな内容が必要でしょうか。保育方針は保育活動の内容とその裏にあるリスクを解説するうえで不可欠ですので、まず、保育方針の実践として、どんな活動をするのか、年齢、発達段階別に記述します。そのうえで…

・子どもの成長・発達を促す活動を進め、かつ子どもたちが集団として関わりあうことを積極的に進めるため、活動の中でケガ（外傷）は起こる。
・子どもの自然な育ちの一部として、かみつきやひっかき、ケンカは起こる。
・発達にそぐわない活動を保育士が行った結果によるケガ以外は、育ちに付随するものである。
・ケガが起きた場合は、次のような対応策をとる（園の取り組みを書く）。
・一方、睡眠中、食事中、プール活動中など、死亡が起こりうる状況では、次のような予防策を講じ、万が一の場合は、次のような対応策をとる（園の取り組み）。
・感染症の予防については、次のように取り組む（具体的に）。保護者がすべきこと（早めに受診をする、治癒証明書を提出する―など）。
・登園時や退園時には、職員が見守れないこと。保護者がすべきこと（例：園から出る時は手をつなぐ。駐車場内で子どもが遊ぶ状況をつくらない―など）。
・園で撮影した写真の取り扱い（具体的に）。保護者がすべきこと（他人の子どもが写っている画像をネット上に載せない―など）。

まだまだたくさんありますが、こうした内容を書いておくことは「知らなかった」「対応がいつも違う」と言われるリスクを減らす一助になります（詳しくはNPOサイト、および新刊『子どもの「命」の守り方～変える！事故予防と保護者・園内コミュニケーション』をご覧ください）。

「保育の工夫―現場を訪ねて―」

保・幼・小連携に独自の「にじいろノート」を活用

子どもの日常の姿や持ち味など綴り、情報を共有

四條畷市・忍ヶ丘愛育園

四條畷市の忍ヶ丘愛育園は開園9年目に入り、140名の卒園児を小学校へ送り出しました。小学校との交流や連携もすすめられていますが、大きな成果をあげられている「にじいろノート（サポートブック）」の取り組みを紹介します。

5歳児が小学校へ入学した時、困らないようにするにはどのような取り組みが必要か、子どもの目線で考えることから始まったものです。

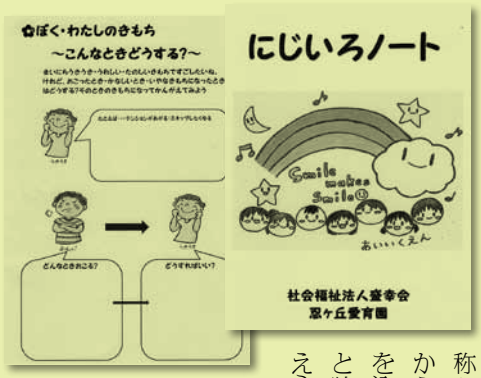
「サポートブック」は本来、配慮の必要な子どもたちのライフステージが変化する際（入学時など）に、普段のようすや関わり方など、担任の先生や関係者に知っておいてほしい情報を共有するためのツールです。

配慮の必要な子どもが園に通われ始めたことがきっかけとなり、全員にこの「サポートブック」を作成することになったそうです。名称も「サポートブック」から未来につながる願いを込め「にじいろノート」と独自のネーミングに変えられました。

環境が大きく変わっても、自分の居場所を見失わず安心して過ごしてもらうために、ノートには毎日、一人ひとりを大切に声かけや働きかけをしてきた保育園ならではの関わり、ありのままの子どもの姿、その子らしさ、保育園生活で体感した子どもの持ち味などが綴られており、そして「私（僕）は大丈夫！」と自信をもった子どもに育ってほしいという保育者の願いがつまっています。

また、絵本「ぼくのニセモノをつくるには」（作・ヨシタケシンスケ）を子どもたちにも読み聞かせ、自分とはどんな人間なのかを一緒に考え、作成されるそうです。

保・幼・小の連携をすすめるうえで、「保育所と小学校の情報交換だけにとどまらず、子どもたちが自己肯定感をもって小学校へ進級できるよう、このノートに子どもたちや職員の思いを込めて繋いでいきたい」と古賀真智子園長は話されました。（四條畷市　K・M）



地域とともにふれあい大切に

開園約２年
運動会や秋祭りで交流深める

堺市・堺めぐみ学園分園

堺めぐみ学園分園は26年4月に開園したばかり。周辺には畑が広がり緑多い環境です。

運動会や地域の祭りを通じ地元のみなさんと活発な交流を進めています。

昔から農業が盛んだった土地柄で、園庭の前の畑には、地域の方が育てられているキュウリやトマト、いちごなどが見えます。戸外遊びにはいつも園児たちが興味深そうに野菜や果物を観察しています。この夏には、地元の方が園の玄関にひまわりを植えてくださり、送迎時に、保護者の方も子どもたちと一緒になってその成長を楽しまれている光景がみられました。

今年は9月に近隣のグラウンドをお借りし、初めての「親子ふれあいうんどうかい」を開催しましたが、自治会のみなさんには前日の準備段階からフィールド内の整備などを助けていただきました。当日は天候にも恵まれ、子どもや保護者の方はもちろん、地域の方にも種目に出場してもらい楽しい運動会となりました。

10月には地域の伝統行事、秋祭りがあり、だんじりが出ます。昨年から分園にも立ち寄ってもらっていますが、園児たちは揃いのハッピ姿でお出迎え。近くで見る機会のない大きなだんじりの前で記念写真を撮りました。地域の方もハッピ姿で、町内全体がお祭りモードに包まれます。

分園の開園以来、その母体となった堺めぐみ学園に「むかし娘が通っていた」とか「孫が通っていました。懐かしいですね」と直接訪ねて来られ、思い出話をされる地域の方もおられます。

ゆったりと温かな雰囲気が特色の分園は、親と子が大切な時間を過ごせる場所でありたいと思っています。そのためにも地域のみなさんとの連携を一層深めたいものです。

（堺市　S・K）

編集後記

あっという間にもう師走。新制度がスタートし、次から次へと変わる事柄に戸惑う日々を送られた園が多いのではないでしょうか。

私たちも皆さまに少しでもお役に立てるよう研修を企画していますが、いかがでしょうか。保育士不足の中、今いる職員が力をあわせ、互いに励まし高めあえる職場づくりに努めたいものです。制度が変わっても揺るぎない保育を進めて行きましょう。

年内に済まされることはやり残さず、新しい年を気持ち良く迎えられるよう心がけましょう。温暖化といえども寒さが増します。体調を整えて、良いお年をお迎えください。

来年2月の保育士研修会にも奮ってご参加ください。